

11 月例会報告

【日 時】2000 年 12 月 21 日(木)19:15～21:30 筑波大学附属高校 3F 会議室→21:40～1:40 カリンカ

【参加者】内田正人(B&D)、宇都宮徹彦(写真家／スポーツナビゲーション)、加藤栄二(ライター)、川前真一(東京ベイフットサルクラブ)、澤井和彦(東京大学)、中塚義実(筑波大学附属高校)、野口良治(東京都サッカー協会)、広瀬一郎(スポーツナビゲーション)、藤岡康((株)三菱総合研究所)、宮崎雄司(サッカーマニア編集・発行人)、山戸一純(FUTSALNET)、横田祐介(筑波大学大学院修士)

【新規参加者】上村智士郎(スポーツナビゲーション)、四方健太郎(立教大学 経済学部)

注1) 参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

フットサル連盟は必要か—21 世紀のスポーツと、競技団体のあり方
(フットサルプロジェクト1)

フットサルプロジェクト1は、「フットサル連盟設立にあたっての有効なアドバイス(それが現場に反映されることを願いながら)を行う」という目的を持った、サロン2002の内部組織です。プロジェクトからの報告は、単なる報告ではなく、報告書完成へ向けての修正の場でもあります。

このような観点から本報告は、通常の月例会報告とは異なり、当日の議論(カリンカも含む)だけでなく、その後のメールでのやり取りや報告書からの引用も含めて再構成し、関係者のチェックを経て公開するものです。文責は作成者である中塚に属します。

<プレゼンテーション>

■ はじめに(プロジェクト報告書冒頭の「はじめに」と同一です)

近年におけるフットサルの発展には目を見張るものがあります。「高度化」と「大衆化」、つまりトップのレベルアップと底辺への広がり両面からみられますが、一言では表現できないほどの多様な広がりを見せています。こうしたフットサルの広がりや深まりに対応すべく、日本フットサル連盟は2000年度より新しい組織へ移行し、各都道府県連盟を統括する団体となりました。これを受けて各都道府県でも「フットサル連盟」を組織するための準備がはじまり、東京都サッカー協会フットサル委員会でも1999年度末より検討が進められてきました。

フットサルは、柔軟なチーム編成、インターネットによる情報交換、民間施設の普及など、従来のスポーツにはみられない、新しい現象がみられます。そのため、従来型の競技団体の組織化理論では対応できないのではないかとすることは、委員会内の議論でも出ていました。フットサル連盟の組織化は、フットサルの発展だけでなく、21世紀の競技団体のあり方を探る上での大きなテーマです。

ところで、サロン 2002 は、サッカー・スポーツを通して 21 世紀の"ゆたかな 暮らしづくり"を目指すことを共通の"志"とする、多様な人材によるゆるやかなネットワークです。会員にはフットサルに関わる人も多く、民間施設で働く人、施設を利用してイベントを提供する人、インターネットで情報を発信する人、その情報を活用してフットサルを楽しむ人、競技団体側から関わる人など、「フットサル」の多様性を示しているといえるでしょう。これらの人が持つ情報やパワーを結集し、「首都圏のフットサル事情、および 21 世紀のスポーツ組織のあるべき姿を探りながら、東京都フットサル連盟設立への有効なアドバイスを行う」ための提言を、市民レベル、利用者レベルからしようではないかとの目的で組織されたのが、サロン 2002「フットサルプロジェクト」です。2000 年 10 月からのわずか 3 ヶ月の検討期間ではありますが、ここにその報告書第一弾をお届けします。

本報告は当初、2001 年度からの東京都フットサル連盟の組織化に間に合わせるために 12 月に「提言」をまとめるべく準備を進めて参りました。しかし、検討を重ねるごとに多くの課題が明らかにされ、なかなかまとまりを見せません。その間、2001 年度からは日本フットサル連盟の指導による、東京都フットサル連盟の組織化が為されることも情報として入って参りました。そこで、拙速な提言の提示ではなく、現状把握と連盟の必要性のピックアップ、そして将来的なイメージを提示することにしました。

まず第一部において、現時点での東京都(首都圏)のフットサルの現状を様々な角度から考察します。フットサル連盟への期待にも言及しております。第二部では、サロン 2002 フットサルプロジェクトが考える望ましい競技団体のあり方を提示します。それは理想論であり理念の提示です。机上の空論と言われるかもしれません。実際に競技団体を組織し、運営する中では、理念よりも現実が先行することは承知の上です。だからこそ敢えて、私たちは理想論を述べました。将来のイメージなきまま現実への対応に追われるだけでは、国民の文化としてのフットサルの、スポーツの健全な発展はあり得ないでしょう。

2001 年度から始まろうとする新しい連盟の枠組みの中で、どうやって現実的な課題を解決するかについては、3 月に再度レポートを提出したいと考えます。

■第 1 部. 首都圏におけるフットサルの現状

1. "施設"の観点から(川前真一)

- 1) 首都圏(東京都)におけるフットサル施設の現状
- 2) 東京都内における民間フットサル施設の現状
- 3) 東京ベイフットサルクラブの現状
- 4) 課題
- 5) 展望

2. "人"の観点から(豊田幸夫・杉村宏道)

- 1) フットサルに関わる個人、チーム、クラブ概論
- 2) 首都圏(東京都)におけるフットサルに関わる個人、チーム、クラブの現状

3) 豊田幸夫氏のチーム、杉村宏道氏のチームの現状と課題

3. "情報"の観点から(山戸一純)

- 1) フットサル情報の現状
- 2) フットサルネットが提供する情報の現状
- 3) 東京都の連盟に望まれること

■第2部. 東京都フットサル連盟設立にあたって(これは当日の議論を経た報告書の目次の引用です)

1. 20世紀における競技団体の使命と現状

2. 21世紀における競技団体のあり方

- 1) これからのスポーツとその愛好者のとらえ方ーフットサルに関連して
- 2) 多様なスポーツの受け皿"クラブ"を育てることが原点
- 3) 「補完性の原理」に基づく底辺からの組織化を
- 4) 自立した個人を育てる"スポーツ教育"の充実を
- 5) 協会と連盟の住み分けー組織論の観点から

3. 「東京都フットサル連盟」の将来像

- 1) 連盟の意義
- 2) 連盟の構成員ー加盟団体はクラブ、会員は個人、大会参加はチーム単位で
- 3) クラブが未成熟な段階における過渡的な対応策
- 4) 組織化にあたっての課題

<ディスカッション>

■「補完性原理」に関してー澤井氏からの補足

まさしくその通りだが、これはカソリックの社会理論であって、日本人にはなじまないのではないかという意見もある。カソリックの宗教的原理は、神と個人の誓約の上で個人が自立するところから始まり、補完性原理もそこから出てくる。しかし日本人にはそういった誓約の対象がない、共同体社会である。自分が社会に投げ出された時に行動の原則がない。そうすると周りの人に合わせるしかない。長いものに巻かれてしまう。連盟のような大きな傘を作ってしまうと、日本人はすぐその中に入って依存しがちである。

例えば、連盟ができて、安価な大会をやってしまうと、民間の小さなところがつぶれてしまうかもしれない。サービスの内容は違うのだが、連盟というだけで中身を見極めようとしなくてそっちへ行ってしまう。せっかく育ち始めている個々の芽が摘み取られ、市場が育たなくなってしまうのが怖い。

これをどう解消しつつ、補完性原理をベースにしてやっていくのかは、自分にとっても大きな課題である。

■フットサル保険について

・「登録すれば自動的に保険に加入できる」ようにしてみてもどうか。保険会社がうんと言うかだが、おそらく可能だろう。スキーでも、ワンシーズン通用する保険がある。

・保険の扱いは、主催者側が保険に加入するか、または保険に入っているチームのみ参加できるとするかのどちらかである。全日本フットサル大会では、主催者側は「責任は負いません」の一筆を入れている。

・B&Dでは、大会全部に適用できる保険に入っている。B&Dの大会登録と保険加入がワンセットになっているという感じ。大体3000~4000人単位で加入し、一人当たり100円程度か。参加者にはメンバー登録してもらう。参加料に保険料が含まれる形。フットサルでけがが多いということは、保険やさんも今までわからなかったようだ。

・多くの大会に参加する人は、その都度保険に入るよりも、年間通して保険に入った方が良いのではないか。連盟が保険会社と話をし、新しい保険をつくり、登録と同時に保険加入という制度ができれば良いのではないか

■協会と連盟の関係

・協会への加盟と連盟への加盟は、これまでも必ずしもイコールではなかった。例えば中体連に加盟しているがサッカー協会第3種には登録していないチームなどがある(協会登録を促してはいるが)。これらは、中体連の大会には出られるが、協会の行うサービスは受けられない。協会のサービスが得られないとは、例えばトレセン活動へ参加できない、東京協会の広報誌が来ない、チケットの案内が来ない、審判講習会や指導者講習会の案内が来ないなど。しかし情報レベルにおいては、今は入手先がいろいろあるので、協会に登録しなくても情報が入手できる。あまりデメリットは感じていないのではないか。

・位置づけとしては、サッカー協会の傘下にある日本フットサル連盟になる。

・ビーチバレーは規約上、バレーボール協会に登録していないと出場できないことになっている。実際の運用上、どうなっているかはわからない。フットサルも、昔はサッカー協会に登録していないと出られませんとしていたが、現行のフットサル大会登録制度では、サッカー協会に登録していなくても大丈夫(大会参加申し込みがそのまま協会登録となる)

・サッカー協会のミニチュア版を作るようなもの。国際フットサル連盟はなく、FIFAの中のフットサル。日本でもそのような関係になるだろう

・どこかの連盟に登録している人がフットサル連盟に登録することは可能。小・中・高ではサッカーのトレーニングとしてフットサルをやっているところが多い。フットサル連盟は社会人の連盟になってい

くような気がする。

- ・実際に進行しているのはそうである

- ・フットサル連盟を作るのであれば、サッカー協会に入っていなくても、他のスポーツをやっているも入れるような、そういう受け皿になってほしい。柔軟な発想をした方がすそ野が広がる

■フットサルのとらえ方

- ・世の中にフットボールと呼ばれるものは沢山ある。おおもとのフットボールからどんどん分化し、ラグビーとアソシエーションに、ラグビーもユニオンとリーグに分かれていったように、フットサルはアソシエーションフットボールから分かれた新しいフットボールと考えて良いのではないかと。サッカーにこだわる必要はない。広い意味でのフットボールの中の、ラグビーでありサッカーでありフットサル。

- ・いや、やはりサッカーの中に位置づけられるのではないかと。6人制バレーと9人制バレーの差ぐらいではないかという気がする

- ・もともとフットサルとサッカーは別物であった。サロンフットボールをFIFAとは別の組織が統括していたのを、FIFAがサロンフットボールがほしくて統合していった。競技としてどうかというよりも、政治的なところでサッカーの中に取り込まれていった経緯がある。日本の中で、世界の大きな流れと無関係に、全く別の、新しいフットボールの連盟として立ち上げることに無理があるのではないかと

- ・日本のサッカーを代表する団体は日本サッカー協会。代表をつくることのできるのもそこだけ。別の組織を作ってやってしまうとワールドカップにも出られなくなる。組織的にはサッカーの中に入らざるを得ない

- ・アメリカのインドアサッカーは独立リーグ。やっている選手はMLSの選手とかもいるが、「壁にぶつけてオーバーヘッド」など、全然違うスポーツとしてやっている。その一方で彼らがフットサルの大会に出ないかという、なぜかフットサルの代表に選ばれてやっているのも彼ら。そのあたりがよくわからない。組織的にはサッカーの中に入らざるを得ないとは思いますが

■クラブに関して

- ・連盟とのギブアンドテイクはイメージしにくいですが、クラブという単位なら、個人との関係、直接的見返りもイメージしやすい。そこをもっと育てなければならぬ、ということを強調したい。フットサルの場合のクラブには、1)自ら保有する施設をベースとするクラブ(東京ベイフットサルクラブなどの民間施設)、2)公共施設を利用しながら地域で活動するクラブ(府中水元クラブなど)、3)志を同じくする者で集まったチームをベースとするクラブ(FCチェリーなど)、これらリアリティのある、従来型のクラブとともに、4)ネット上のバーチャルクラブ(フットサルネット愛読者の組織化など)も考えられるだろう。

- ・ネット上のクラブがデジタル・クラブだとすると、B&Dはアナログ的。情報発信基地としての小売店の役割は結構大きい。小売店がメディアになっている。21店舗というネットワークを持っていたから成り立ってきた。

- ・サッカーショップには、新聞や雑誌には載らないが「あそこに行けば情報がある」という機能がある

■連盟の運営

- ・連盟ができた時に、それを誰が運営するのか。例えばリーグ戦の会場を押さえたりするのは誰なのか。サッカー協会の人ができるのか。その構成によって、考え方が変わるような気がする。

- ・意思決定機関(理事会・評議員会)と事務局に分かれる。理事会の構成員は、各種別代表と専門的な立場(民間施設やリーグ関係者、審判・技術など)の代表から出されるだろう。下働きするのは事務局。

- ・理事をどういうカテゴリーから選出するのが重要。それによっては、実際にやっている人の意見が反映されないこともあり得る

- ・「学連」は、加盟している各大学から出てくるが、専従の事務局員もいる。加盟大学からお金を集めて雇っている。サッカー協会ももともとは、加盟団体(チーム)の代表者が来て、全体のことを一所懸命やってくれていた。例えば古河電工や三菱重工の人たちが、「会社の仕事はええから協会の仕事やってこい」と善意で出てきていただいて、地道にささえてくれていた。それが何年も何十年もやっている中で、「閥」のように捉えられたりする、ということではないか。

■2001年度からの連盟について

- ・大会登録制度はそのまま生きて、新たにチーム単位での年間登録を考えている。単純に言う「20世紀型」。大会参加のための年間登録。ただ、どういうサービスができるかということは一所懸命考えていると思う。兵庫県の事例をベースにしているようだ

- ・兵庫県にはまた特殊な事情がある。それを先行事例として全体でやってしまうのはどうか

- ・サッカーとの掛け持ちは可能。移籍も可能。但し、移籍規定に従い、元いたチームから籍を抜いて、二重登録にならないように手続きすることになる

■本プロジェクトの報告書について

年内目標で報告書をまとめる。いつまでたっても完成品はできない。どこかで線を引いて、「これが現時点でわかっていること、合意していること」というものをつくる。年明けには協会に提出(具体的には1月17日のフットサル委員会前か)。

1～3月にかけて、2001年度から実際に動き出す連盟の枠組みを踏まえた上で、ではどうすれば良いかに関する報告書第2弾をまとめる作業に入る。年度末にはこれらを合わせて、しっかりした冊子にして世に問う。

プロジェクト1は年度末まで。その時点で、より現実的な課題が見えてくれば、「フットサルプロジェクト2」が誕生するだろう。

<中塚の感想・意見>

かなり密度濃くやってきたフットサルプロジェクト1だが、全員の意見を一つにまとめるのは容易ではない。おそらく「正しい道」は一つではないのだろう。

議論は尽きない。しかし現実はずいぶん進行する。「正しい道」については、研究者・実践者を交えて今後とも時間をかけて検討する必要があるが、意思決定機関に対する情報提供は急を要する。限られた情報しか持たない場合、そこでの判断が現実には合わないことは多々ある。〈どこかで線を引いて、「これが現時点でわかっていること、合意していること」というものをつくる〉としたのは、完成されたものでなくても、フットサルに関する"生きた情報"をまとめ、提示することが必要と判断したからであり、それだけでも意義があると考えたからである。この先は、意思決定機関(ここでは東京都サッカー協会)のリーダーシップの問題である。私もその端くれに携わる者として、高い当事者意識を持ちながら取り組みたい。

「現実に反映されないと意味がない」と感じている方も多いただろう。実際、2001年度からは日本フットサル連盟主導による新しい登録制度が採用され、本プロジェクトにおける合意内容とは少し異なる形で動き出すようである。

しかしながら本プロジェクトでは、不完全ながらも一つのモデルを提示することができた。それを理想とするなら、実際に動き出すであろう新制度は、「クラブが未成熟な段階における過渡的な対応策」の一つと考えることもできる。「正しい道」は一つではないし、その時点での「正しい手順」というものもある。次は、新制度を踏まえて、「では理想へ向けてどのような第一歩を踏み出せばよいか」を検討したい。そこまでがフットサルプロジェクト"1"の使命である。

フットサルプロジェクト"1"で取り上げている話は、フットサルに関係していない人にとっても、スポーツの今後のあり方を探る上で非常におもしろいと思う。フットサルプロジェクト"2"や"3"がどういうテーマを掲げて発足するのか、または言い出しっぱなしのまま任期満了でそのまま解散するのか、今後の成り行きが楽しみである。